

# K 国 語 問 題

## 注意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてH Bの黒鉛筆またはH Bの黒のシャープペンシルで記入することになっています。H Bの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。  
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

### マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにH Bの黒鉛筆で棒の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しすぎはきれいに取り除いてください。

#### マーク例

①	1	2	3	4	5
	○	○	●	○	○

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

船は兵を積み終るとすぐ岸壁を離れたが、なかなか出港しなかった。七月一日に出るといふ者がいるが、あまりあてにならない。一坪十五人の「お蚤棚」はひどく暑いので、我々は終日甲板へ出て港を眺めて暮した。

見渡す門司の海に迫った丘の中腹の道を、湧くように兵隊が駆けて来るのが見える。恐らく我々の船団の一つに乗りに来る兵であろうが、私はその矮小な体軀に驚いた。我々も中年の弱兵であるが、見てくれはもう少しいつもりである。そういうずんぐりした兵隊は、同じ船にも沢山いた。これも私にとっては祖国の敗兆の一つであった。

私の好んで坐りに行つたのは、舳先<sup>(b)</sup>であった。そこは甲板が次第に反って高くなり、欄<sup>(c)</sup>に上ると、眼くるめく下に青々と水がたたえているさまが、特に好きであった。玩具のような関門連絡船が、下の方を通つて行く。夜、それは赤や青の灯をともして、仕掛花火のように綺麗<sup>(d)</sup>であった。

しかしこうして無為に眺め暮しているうちに、私はだんだん自分の惨めさが肝にこたえて来た。船は明日にも解纜<sup>(e)</sup>するかも知れない。死は既に目前に迫っている。この死は既に私の甘受することにきめていた死ではあるが、いかにも無意味である。

私はこの負け戦が貧しい日本の資本家の自暴自棄と、旧弊な軍人の虚栄心から始められたと思つていた。そのため私が犠牲になるのは馬鹿げていたが、非力な私が彼等を止めるため何もすることが出来なかつた以上止むを得ない。当時私の自棄<sup>(f)</sup>つばちの気持では、敗れた祖国はどうせ生き永らえるに値しないのであつた。

しかし今こうしてその無意味な死が目前に迫つた時、私は初めて自分が殺される<sup>(g)</sup>ということを実感した。そして同じ死ぬならば果して私は自分の生命を自分を殺す者、つまり資本家と軍人に反抗することに賭けることは出来なかつたか、と反省した。

平凡な俸給生活者は所謂反戦運動と縁はなかつたし、昭和初期の転向<sup>(注1)</sup>時代に大人となつた私は、権力がいかに

強いものであるか、どんなに強い思想家も動揺させずにはおかないものであるかを知っていた。そして私は自分の中に少しも反抗の欲望を感じなかった。

反抗はしかし半年前、神戸で最初に召集を覚悟した時、私の脳裡をかすめた。かすめたのはたしかにそれが一個の可能性にすぎなかったからであるが、その時それが正に可能性に終った理由を検討して、私は次のことを発見した。即ちその時軍に抗うことは確実に殺されるのに反し、じっとしていれば、必ずしも召集されるとは限らない、召集されても前線に送られるとは限らない、送られても死ぬとは限らないということである。

確実な死に向つて歩み寄る必然性は当時私の生活のどこにもなかった。しかし今殺される、寸前の私にはそれがある。

すべてこういう考えは、その時輸送船上の死の恐怖から発した空想であつた。空想はたわいもないものであるが、その論理に誤りがあるとは思われない。

しかし同時に今はもう遅い、とも感じた。民間で権力に抗うのが民衆が欺されて以上無意味であるのにもまして、軍隊内で軍に反抗するのは、軍が思うままに反抗者を処理することが出来る以上、無意味であつた。私にはやはり「死ぬとは限らない」という一縷の望みにすべてを賭けるほかはないのを納得しなればならなかつた。

私はいかにも自分が愚劣であることを痛感したが、これが理想を持たない私の生活の必然の結果であつた以上、止むを得なかつた。現在とても私が理想を持っていないのは同じである。ただこの愚劣は一個の生涯の中で繰り返され得ない、それは屈辱であると思ふ。

その時の私には死と戯れるほかすることがなかつた。そして死の関心は自然に私を自分の生涯に関する反省に導いた。私は広い欄の上に身を横たえ、水を眺めながら、生涯を顧みた。回想は専ら私の個人的幸不幸に関するものであつた。

察しかつた瞬間、不幸であつた瞬間を、注意の及ぶかぎり思い出し、その時私が果して何者であつたかを反省した。反省は多く後悔を伴わずにはいながつたが、死を前にして後悔すら楽しかつた。

私は何故か死ぬ前に、つまり船の出る前に、私の全生涯の検討を終えなければならぬと感じた。

今日はこちらまで明日はあそこまでと予定を立てて回想したと記憶する。全生涯を遍歴するのにたしか三日かかったと記憶する。この作業は後比島(注2)のチュウトン生活中も繰り返された。がそれは検討の興味よりも、回想する快感によつたと思われる。

私は自分の過去の真実と思つていたものに幾多の錯誤を発見した。例えば私が得ることが出来なかつたために、愛していると思つていた女について思い出は少なく、愛していなかつたために、得ることが出来た女のこと詳細に思い出された。感覚の裏打のない記憶が早く薄れるためかも知れない。

しかし最も幸福な瞬間が何の思い出を残さないことは、スタンダール(注3)が注意している。思い出によつて構成された過去は、必ずしも真実を尽していないかも知れない。

妻と私の間にもこうした記憶に残らない時間があつたかも知れない。もし妻と品川で別れる時、私に言葉がなかつたのが、そういう原理によるのならば倅(注4)である。

私は水を見詰めた。そこには私がこれまでただの戯れの恋と思つていた女の映像が浮んだ。その時彼女が現われたのは、多分私が彼女と海で泳いだことがあつたからであろう。女は男に媚(注5)びることを知つていた。ハデな海水着を着た彼女は浪に身をヒルガエ(注6)して笑つた。

私の観照は次第に白昼夢の色を帯びて来た。水の上を上の女の子が匍(注7)つて来た。子供は轎車(注8)に乗つた動物の玩具のように、両手を前に突いたままの姿勢で進んで来た。船尾から眼の下を通り、私の眼の移るに従つて舳先へ消えた。子供はもう匍う年頃ではなかつたから、これは私の観照の舞台が水という平面であつた結果であろう。

子供は私の欲するままに再び船尾の水面に現われ、懸命に前を向いて進んで来た。その幻像の上に、私が何故品川で妻が与えた千人針(注9)を投げる氣になつたか不明である。

いずれこれは私の好まぬ迷信的持物であつたが、何か記憶に残らない発作にあつたのであろう。強いていえば私は前線で一人死ぬのに、私の愛する者の影響を蒙り(注10)たくなかつたといえようか。国家がその暴力の手先に男子

のみを必要とする以上、これは純然たる私一個の問題であつて、家族のあずかり知るところではない。

私はそれを雑囊ざつのうから取り出すと、何となく拵なぐさげて海に抛なつた。夕方はまだ明るかつた。布はあるとも見えない風にあおられ、船腹に沿つて船尾の方へ飛んで行つた。

ぞわめきが目白押しに欄に並んだ兵の間に起つた。「ああ、ああ」と叫びに交つて「千人針やないか」という声が聞えた。私は自分の純然たる個人的行為が、こんな大勢に注意を惹いてしまったのに少し慌てた。

千人針は水に落ちてもなかなか沈まず、暮れかかる水面に白く浮んで、さらに船尾の方へ流れて行つた。みな私を見ているような気がした。近くの二、三人の兵士の顔は怪訝くわいげんと共に非難を表わしていた。

「わざと棄てよつたんや」と一人がいつた。

私の顔は多分笑つていたろうと思う。私は欄を降り素速くその場を離れた。

「あの兵隊です」という声を背に聞いた。

兵が下士官にいうような調子であつた。私はまた慌てた。そこらにいた兵は私の隊の者ではなかつたが、下士官の氣紛れから、「銃後の真心の結晶を何故棄てた」などと平手打を喰つてはつまらない。

足を早めて舳先を廻り、反対側の甲板へ出ると、あたかも空いていた便所へ入つた。便所は粗末な木で造られ、海へ突き出ていた。臭気の中で蹲またみながら、私の口は依然笑いに歪ゆがんでいたが、突然眼が熱くなつた。

(大岡昇平「出征」による)

(注) 1 転向時代——共産主義者、社会主義者が権力の弾圧で自らの思想を放棄させられた時代。

2 比島——フィリピン諸島。

3 スタンダール——フランスの小説家(一七八三年—一八四二年)。

4 千人針——一枚の布に千人の女性が赤糸で一針ずつ刺して縫い玉をつくり、武運長久を祈つて出征兵士に贈つた。腹巻きなどにして弾丸よけのお守りとした。

問

- (A) 線部(イ)～(ハ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書<sup>かいしよ</sup>で記すこと)
- (B) 線部(a)～(c)の読みを、平仮名・現代仮名遣いで記せ。
- (C) 線部(あ)～(う)について。本文中での意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、それぞれ番号で答えよ。

(あ) たわいもない	1 あどけない	1 いったい
	2 とりとめのない	2 本当に
	3 配慮の足りない	3 案の定
	4 どこにでもある	4 恐らく
	5 不自然な	5 ところで
(い) 果して	1 いったい	1 ずっと
	2 本当に	2 いかにも
	3 案の定	3 まるで
	4 恐らく	4 ちようど
	5 ところで	5 すつかり
(う) あたかも	1 ずっと	
	2 いかにも	
	3 まるで	
	4 ちようど	
	5 すつかり	

- (D) 線部(1)について。「私」はどのようなことに対して「惨めさ」を感じているのか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 自分の生命を脅かすものへの抵抗すらできないまま無意味な死を目前にしていること
- 2 資本家の自暴自棄や軍人の虚栄心の犠牲になることに馬鹿らしさを感じていること
- 3 無意味な死が目前に迫ってくるそのときまで自分が殺されるといふ実感がなかったこと
- 4 どんなに強い思想家も動揺させずにはおかない権力の恐ろしさを思い知らされたこと
- 5 すでに死を甘受していた自分のなかに生きることへの執着がまだ残っていたこと

- (E) 線部(2)について。「その論理」とはどのような論理か。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 恐怖から発する空想は、可能性に過ぎないものを必然のように見せてしまうこと
- 2 いま殺される寸前の私だからこそ、戦争の愚かさが身にしみて感じられるということ

3 どのような境遇にあつても、権力に抵抗する意志を失つてはいけなさと考えること

4 自分が生き残るためならば、どのような手段を用いてもいいのだと考えること

5 あらゆる状況において、確実な死に向つて歩み寄らないように行動すること

(F) 線部(3)について。「私」はなぜ「自分が愚劣である」と感じるのか。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 反抗者を思うがままに処理できる軍隊の内側で反抗するのは無意味なことだと諦め、いつさいの反省もせずに死の観念と戯れているから。

2 自分もまた権力に欺された民衆のひとりであるにもかかわらず、他の兵士にはない想像力を駆使することができると自負しているから。

3 権力が自分を殺そうとしていることを知りながら、権力に服従することが自分を生き延びさせる唯一の方法だと考えているから。

4 理想を持たない人間であるにもかかわらず、いざ自分が死に直面したときには「死ぬとは限らない」という期待を持っているから。

5 確実な死に向つて歩み寄ることを強要されているにもかかわらず、自分自身がその責任を負おうとして後悔や反省を重ねているから。

(G) 線部(4)について。このときの「私」の心情を説明したものととして最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 慌てふためく兵士たちを嘲笑つてやろうという意地悪な気持ちと、つい理性を忘れて子どもじみた行為をしてしまった自分に対するいいよのない嫌悪感。

2 「銃後の真心」という幻想をやつと打ち破ることができたという達成感と、もうこれでは自分には権力に抵抗する術がなくなつてしまったという焦燥感。

3 これが生への執着をすべて断ち切ることができたという安堵感と、騒ぎが大きくなれば下士官から暴力をふるわれることになるのではないかという恐怖感。

4 雑拙なやり方によってしか家族への思いを断つことができなかつたという自分自身に対する憐憫と、もうそこに戻ることにはできないのだという喪失感。

5 迷信に頼らない自分なら最後まで物事を論理的に考えていけるはずだという自信と、理性のために家族への思いを犠牲にしたのではないかという罪悪感。

(H) 「私」は妻からもらつた「千人針」を棄てたことに対してさまざま思索を巡らせているが、最終的にはどのような結論に至っているか。最も適当な一続きの部分を句読点とも三十字以内で抜き出し、最初と最後の五字をそれぞれ記せ。

(I) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 幸福な瞬間は何の思い出も残さないがゆえに、記憶のなかには幾多の錯誤が含まれることになる。

ロ 私は日本が戦争に負けると思っていたし、敗れた祖国で生きながらえる意味もないと感じていた。

ハ 他の兵士たちにとって、家族からもらつた千人針を海に流すというのは考えられない出来事だつた。

ニ 私、船が港を離れる前に自分の全生涯の検討を終えなければ死ぬ覚悟ができなかつた。

ホ 妻や子との生活よりも、これまでただの戯れの恋だと思つていた女の記憶こそ真実がある。



二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点、送り仮名を省いたところがある。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

太尉(注1) 沛国(注2) 劉矩(注2) 叔方(注2) 為(注2) 尚書令(注2) 失(注2) 將軍(注2) 梁冀(注2) 意(注2) 遷(注2) 常山相(注2) 去(注2) 官(注2) 冀(注2) 妻(注2) 兄(注2) 孫(注2) 礼(注2) 為(注2) 沛相(注2)。  
 矩(注1) 不敢還鄉里、訪(注2) 友人彭城環玉都(注2)。玉都素敬(注2) 重矩(注2)、欲(注2) 得(注2) 其意(注2)。喜(注2) 於(注2) 見(注2) 歸(注2)、為(注2) 除(注2) 處(注2) 所(注2) 意氣周密(注2)。人有(注2) 請(注2) 玉都(注2) 者(注2)。禍(注2) 至(注2) 無(注2) 日(注2)。何宜為(注2) 其主乎。玉都因(注2) 事遠出(注2)、家人不(注2) 復(注2) 占問(注2)。  
 則(注2) 鬱蒸(注2)、**a** 則(注2) 凜凍(注2)、且(注2) 飢且渴(注2)、如(注2) 此(注2) 一年(注2)。矩素直亮(注2)、衆談(注2) 同愁(注2)。冀亦拳寤(注2)、**c** 為(注2) **d**、上(注2) 補(注2) 從事(注2) 中郎(注2)。復(注2) 為(注2) 尚書令(注2)、五卿三公(注2)、為(注2) 國光鎮(注2)。玉都慙悔(注2) 自絕(注2)。  
(注5)

(応劭『風俗通義』による)

(注)

- 1 太尉——軍事の最高長官。劉矩生前の最高官職。
- 2 叔方——劉矩のあざな。
- 3 梁冀——後漢時代に權勢を振るつた政治家。
- 4 常山相——常山国の行政長官。

問

5 孫礼——人名。

6 占問——様子を見たり尋ねたりする。

7 衆談同愁——他の人々に対して隠し事をせず、心配や苦勞を分かち合った。

8 上補——朝廷に上申して任命する。

9 国光鎮——国政を担う中心的な人物。

10 白絶——自分から絶縁する。

(A)——線部(1)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 矩は不本意にも郷里に帰ることを拒否されて

2 矩はもはや郷里が帰るべき場所ではないと悟り

3 矩は絶対に郷里にだけは帰るまいと思ひ

4 矩はどうしても郷里に帰ることができず

5 矩は郷里に帰らないほうがよいと判断し

(B)——線部(2)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 駆逐する      2 開放する      3 清掃する      4 任命する      5 免税する

(C)——線部(3)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 まもなく災難が降りかかるでしょう

2 もう災難が降りかかることはないでしょう

3 災難がやってきたら太陽も隠れてしまうでしょう

4 災難が訪れるかどうかはわかりません

5 やがては災難のない日々が訪れるでしょう

(D) ——— 線部(4)の訓読として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 なんぞまさにそのしゅとなるべけんや
- 2 そのしゅとなるになんぞよろしきや
- 3 なんぞよろしくそのしゅとなるべけんや
- 4 なんぞまさにそのしゅとならんや
- 5 なんぞよろしくそのしゅとならんや

(E) 空欄 

a
---

d
---

 をそれぞれ補う言葉の組合せとして最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | a | 薄 | b | 厚 | c | 寒 | d | 暑 |
| 2 | a | 薄 | b | 厚 | c | 暑 | d | 寒 |
| 3 | a | 暑 | b | 寒 | c | 薄 | d | 厚 |
| 4 | a | 暑 | b | 寒 | c | 厚 | d | 薄 |
| 5 | a | 寒 | b | 暑 | c | 薄 | d | 厚 |
| 6 | a | 寒 | b | 暑 | c | 厚 | d | 薄 |

(F) ——— 線部(5)の内容について。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 いつ異変に襲われてもいよいよ生活を切り詰めていたのに、そのことを曲解して根に持ち、出世しても自分を無視する劉矩の態度に接して、屈辱を感じ絶望したのである。
- 2 かつては敵対していたはずの梁冀のもとで出世を重ねる劉矩の姿を見て、このような人物を尊敬して住居まで提供していたことについて、自分の浅はかさが恥ずかしくなったのである。

3 自分が尊敬し客人として受け入れていた劉矩を、自分の留守中に勝手に疎んじて何の世話もしなかった家

人の態度を想起し、不徳の致すところだと自責の念にかられたのである。

4 やがては梁冀にも認められることになる劉矩の人柄を信頼しきれず、家人に指示して粗略きわまりない扱いをさせたことについて、自分に先見の明がなかったことを思い知ったのである。

5 梁冀の権勢を警戒するようにとの忠告に心を動かされ、自分の不在中に家人から冷遇された劉矩を放置していたことについて、卑怯な振る舞いであったと痛感したのである。

三 左の文章は、父・八の宮を亡くした姫宮（大君）と中の宮（中の君）が、宇治の地で女房（弁の尼）たちとわびしく過ごすところに、薫が慰問する場面である。これを読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

御服などはてて、脱ぎ棄てたまへるにつけても、片時もおくれたてまつらむものと思はざりしを、はかなく過ぎにける月日のほどを思すに、いみじく思ひの外なる身のうささと、泣き沈みたまへる御さまども、いと心苦しげなり。月ごろ黒くならはしたまへる御姿、薄鈍にて、いとなまめかしくて、中の宮はげにいと盛りにて、うつくしげなるにほひまさりたまへり。御髪などすましつくるはせて見たてまつりたまふに、世のもの思ひ忘るる心地して、めでたければ、人知れず、近劣りしては思はずやあらむと頼もしくうれしくて、今はまた見譲る人もなくて、親心にかしづきたてて見きこえたまふ。

かの人は、つつみきこえたまひし藤の衣もあらためたまへらむ九月も静心なくて、またおはしたり。「例のやうにきこえむ」と、また御消息あるに、心あやまりして、わづらはしくおぼゆれば、とかくきこえすまひて対面したまはず。「思ひのほかに心憂き御心かな。人もいかに思ひはべらむ」と、御文にてきこえたまへり。「今はとて脱ぎ棄てはべりしほどの心まどひに、なかなか沈みはべりてなむ、えきこえぬ」とあり。

恨みわびて、例の人召してよろづにのたまふ。世に知らぬ心細さの慰めには、この君をのみ頼みきこえたる人々なれば、思ひにかなひたまひて、世の常の住み処に移るひなどしたまはむを、いとめでたかるべきことに言ひあはせて、「ただ入れたてまつらむ」と、みな語らひあはせけり。

〔源氏物語〕による

〔注〕 1 御服——八の宮が亡くなった後、姫宮と中の宮が喪に服す期間のこと。

2 薄鈍にて——姫宮と中の宮の服装が、喪服から薄ねずみ色の衣装に変わった様子をいう。

問

- 3 近寄り……側で見て、期待はずれでがっかりすること。
- 4 見譲る人——中の宮のお世話を任せられる人のこと。
- 5 かの人——薫。
- 6 つつみきこえたまひし藤の衣——姫宮が藤の衣(喪服)を着用する喪服期間を口実に、薫との対面を遠慮してきたことを表す。
- 7 心あやまり——姫宮の気分がすぐれない様子をいう。
- 8 例の人——弁の尼。

(A)——線部(1)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 一瞬でも八の宮亡き後まで生き残っていられるだろうとは思わなかったのに
- 2 いつまでも八の宮のおそばにいられるだろうとは思わなかったのに
- 3 近いうちに八の宮と別れて結婚できるだろうとは思わなかったのに
- 4 時がたてばすべてを忘れて生きていけるだろうとは思わなかったのに
- 5 いつかは幸せな日を迎えることができるだろうとは思わなかったのに

(B)——線部(2)の現代語訳を五字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(C)——線部(3)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

- 1 かぐわしい香りに満ちていらつしやつた
- 2 心細そうな様子でひどく嘆いていらつしやつた
- 3 かわいらしい美しさは優れていらつしやつた
- 4 はかなげな風情ですがつていらつしやつた

5 幼い子供のように無邪気でいらしかった

(D) 線部(4)について。陰暦九月の異名を、平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(E) 線部(5)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 名残おしくて      2 不満な気持ちで      3 嘆かわしくて      4 腹立たしくて      5 待ちかねて

(F) 線部(6)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 聞き耳をお立てになつて      2 お断り申しあげて

3 聞き捨てになつて      4 寝たふりをなさつて

5 様子をおうかがいになつて

(G) 線部(7)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 ますます無口になりまして      2 ますます遠慮されました

3 かえつて気持ちが落ち着きまして      4 かえつて白々しく思われまして

5 かえつて悲しみが深まりました

(H) 線部(8)の文法的な説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 名詞+動詞の未然形+完了の助動詞の終止形

2 名詞+動詞の連用形+完了の助動詞の終止形

3 副詞+動詞の連用形+完了の助動詞の終止形

4 副詞+動詞の未然形+打消の助動詞の連体形

5 副詞+動詞の連用形+打消の助動詞の連体形

(I) 線部(9)は誰のことか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 八の宮      2 姫宮      3 中の宮      4 薫      5 弁の尼

(J) 線部(10)は、誰を入れるというのか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

(K) 1 八の宮 2 姫宮 3 中の宮 4 薫 5 弁の尼  
~~~~~線部(イ)は、それぞれ誰に対する敬意を表すか。左記各項の中から最も適当なものを一つずつ選び、

番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

- 1 八の宮
- 2 姫宮
- 3 中の宮
- 4 薫
- 5 弁の尼